

# “鍛えて、ほめて、伸ばす！子どもの可能性”

～「鍛ほめ福岡メソッド」展開中！～



## 福岡教育事務所・社会教育室

事業報告	平成30年度「子どもの体験活動・地域活動指導員研修会」
期 日	平成30年10月22日（月）
参加者	24名
日 程	<p>(1) 開会行事 14:00～14:10</p> <p>(2) 説明 14:10～14:20</p> <p>(3) 講話・演習 14:20～16:00</p> <p>「安全・安心な体験活動の実践」 ～発達障がいの子どものも楽しめるレクリエーション支援のポイント～</p> <p><b>講 師</b> 九州共立大学 スポーツ学部 助教 花田 道子 氏</p> <p>(4) 質疑応答 16:00～16:10</p> <p>(5) 閉会行事 16:10～16:20</p>
活動の 実際	<p><b>【 講 話 】</b></p> <p>九州共立大学助教の花田道子氏に、「安全・安心な体験活動の実践」というテーマで、ご自身の経験や、そこから生まれた思いも含めて、「発達障がいの子どものも楽しめるレクリエーション支援のポイント」についての講話をしていただきました。</p> <p>まず、「レクリエーション支援」による「体験活動の実践」についての話をしてくださいました。そこで行う「支援」とは、「人間交流から生まれる楽しさや喜びを感じさせること」が目的であり、それは発達障がいの子どものもたちの立場や状況なども含めた実情を「知ること」や「理解すること」に支えられているものだと教えてくださいました。</p> <p>また、「場の雰囲気を知覚すること」や「言葉のやり取りをすること」、「目の前に無いものを想像すること」、「対象に注意を集中すること」などは、発達障がいの子どものもたちにとっては苦手であるということを教えてください、その困難さを参加者にゲーム形式で体験させてくださいました。そのゲームは、「スクリーン上で動きまわる文字などを読みながら、そこにたくさん映っている男の子を数えていく。」というものでした。限界を超えた多くの数へ注意を集中することがいかに困難であるかを実感させられ、その困難さを「周りの者が理解することが重要である。」という思いへとつながりました。</p> <p>このように、講話の内容が、論理的に理解することだけでなく、「なるほど！」と実感を持った理解も大切にしました。また多くの子どもたちと実際にふれ合ってきたことからの「理解」と「思い」があふれた講話でありました。</p>

## 〔 演 習 〕

「場の雰囲気」の察知や「言葉のやり取り」、「想像」、「注意集中」が苦手である発達障がいの子どもたちが、他者との交流を行う場合の効果的な工夫を花田先生が演習として紹介していただきました。その方法は、6人グループで12色のカラーマジックを放射状に並べて花火をつくる「マジック」という活動です。ただしルールがあり、「オレンジ色の二つとなりには赤色が光っています。」や「赤色の二つとなりには紫色が光っています。」のような、持っている本人しか見ることができないヒントカードを3枚ずつ持ち、6人で協力して花火をつくりあげていくというゲーム形式のレクリエーション活動です。その活動を我々大人たちが行っても、ヒントカードの言葉から位置関係を想像したり、仲間が動かそうとするマジックの動きに意識を集中したり、「この色はね、ここじゃなくて、こっちか、もしくはこっちだよ。」と言葉のやり取りをしたりと、意欲的に楽しく行うことができるだけでなく、このような交流活動の中で、苦手なことを克服していく子どもたちの姿が目に見え、演習でした。

活動の  
実際



〈講話の様子〉



〈演習の様子〉



全体を  
とおして

参加者の方々が最後に書いてくださったアンケートには、「発達障がいの子どもだけでなく、子ども全体にもあてはまると思った。」という感想もあり、今回の花田先生の講話と演習が、発達障がいの子どもたちだけのものではなく、すべての子どもたちの支援にも生かすことのできるものだと感じ取っていただけたと思いました。

ほかにも「具体的な内容で分かりやすく、実際にすぐ実践したいと思いました。」や「発達障がいの子どもたちへの取り組みがずっと分からず悩んでいましたが、すごくためになりました。」「初対面の人とまとまるのが容易にできた。」などの体感を伴った理解を感じる感想が多くありました。

発達障がいの子どもたちだけでなく、すべての子どもたちが、安全に、そして安心して参加できる体験活動を、今後も各市町で実践されるような支援を続けていきたいと考えます。